

## 西晋の皇太子司馬遼と陸機

王, 昊聰

九州大学大学院人文科学府博士後期課程修了

<https://doi.org/10.15017/4763181>

---

出版情報：中国文学論集. 50, pp.17-31, 2021-12-24. The Chinese Literature Association, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

# 西晋の皇太子司馬適と陸機

王 昊 聰

司馬適（二七八〜三〇〇）、字は熙祖、西晋恵帝の長男で、西晋二代目の皇太子であるが、南朝梁の昭明太子蕭統と同様、帝位に就かず早世した。彼の伝は唐の太宗が御撰した『晋書』にある。だが、彼の生きた西晋太康・元康時代についてこれまで注目されてきたのは、王朝の創始者である武帝とその功臣たち、八王の乱を起こした賈后や諸王、貴族社会の基礎を築いた世家大族などであった。

司馬適については、これまで歴史学と文学の両視点から研究されている。歴史学の視点からは主に二種類の研究がある。一つは「八王の乱」に関するものだが、その多くが研究の一環として重要人物である司馬適を提起するにすぎない。もう一つは西晋の東宮における師傳や属官の配置に関するもので、安田二郎・田中一輝・千田豊などによる成果がその代表である<sup>1)</sup>。

文学の視点からは、司馬適が東宮に集めた文人（張華・陸機・潘尼・張載など）と、彼らの文学創作についての研究があり、佐藤利行・矢田博士・俞士玲などの論著がある。佐藤利行は「愍懷太子府集團」という概念を提出し、矢田博士は東宮における五言詩創作の盛行について論じ、俞士玲は東宮に仕宦した文人を統計した。文学の視点にせよ、歴史学の視点にせよ、司馬適本人を主題とする研究はまだ少ない。彼はいかなる人物であるのか、いかにその人生を過ごしたのか、当時の文士といかなる繋がりがあったのか。本稿は唐の太宗が御撰した『晋書』に基づき、先行研究を踏まえつつ、司馬適の人物像やその人生を整理し、また、当時代表的な文人陸機を例として、彼の当時の文人との繋がり考察したい。



宮中嘗夜失火、武帝登樓望之。太子時年五歲、牽帝裾入閣中。帝問其故、太子曰、「暮夜倉卒、宜備非常、不宜令照見人君也。」由是奇之。

宮中嘗て夜に失火し、武帝樓に登りて之を望めり。太子時に年五歲、帝の裾を牽き閣中に入れり。帝其の故を問ふに、太子曰く、「暮夜の倉卒、宜しく非常に備ふべし、宜しく人君を照見しむるべからざるなり」と。是れに由りて之を奇とす。

嘗從帝觀豕牢、言於帝曰、「豕甚肥、何不殺以享士、而使久費五穀。」帝嘉其意、即使烹之。因撫其背、謂廷尉傅祇曰、「此兒當興我家。」嘗對群臣稱太子似宣帝。於是令嘗流於天下。

嘗て帝に従ひて豕牢を觀るに、帝に言ひて曰く、「豕甚だ肥へたり、何ぞ殺して以て士に享せず、而して久しく五穀を費せるや」と。帝其の意を嘉し、即ち之を烹せしむ。因りて其の背を撫で、廷尉の傅祇に謂ひて曰く、「此の兒當に我家を興すべし」と。嘗て群臣に對し太子の宣帝に似るを稱す。是に於ひて令嘗天下に流る。

司馬適は幼い頃すでに皇帝という地位に對してある程度の認識を持ち、さらに帝王に對する「士」の重要性を認識している。この聡明な皇子は、飢饉の時期に、百姓が「何ぞ肉糜を食わざるや」といった父親の恵帝司馬衷（『晉書』卷四惠帝紀を参照）と対照的な存在である。武帝は司馬適を將來の繼承者にしようと考えた。『晉書』の次の記述によつてそれが窺える。

時望氣者言広陵有天子氣、故封為広陵王。邑五萬戶。以劉寔為師、孟珩為友、楊準、馮蓀為文學。

時に氣を望む者広陵に天子の氣有りと言ひ、故に封じて広陵王と為る。邑は五萬戸なり。劉寔を以て師と為し、孟珩を友と為し、楊準・馮蓀を文學と為す。

太康十年（二八九）、晩年の武帝は天子の氣があるとされた広陵に十三歳の幼い皇孫を封じた。この時の司馬適の教育者について、師の劉寔は前漢濟北王劉勃の十一代孫で、かつて司馬昭の相國參軍を務めた人物である。『春秋』の學に通曉する老臣であり、『晉書』卷四十一に伝がある。文學の楊準は楊修の孫で、武帝朝後期に台頭し、惠帝朝の初頭に權力を掌握した外戚の「三楊」兄弟と同様、弘農楊氏の家柄である。馮蓀は武帝の寵臣馮統の孫である。

いづれも大族が任じられている。

## 二、皇太子になる司馬適の教育

広陵王に封じられた翌年の太熙元年（二九〇）四月、武帝が崩御し、惠帝が即位した。八月、司馬適は皇太子に封じられた。

惠帝即位、立為皇太子。盛選德望以為師傅、以何劭為太師、王戎為太傅、楊濟為太保、裴楷為少師、張華為少傅、和嶠為少保。元康元年、出就東宮。

惠帝即位し、立てて皇太子と為す。盛んに德望を選びて以て師傅と為す。何劭を以て太師と為し、王戎を太傅と為し、楊濟を太保と為し、裴楷を少師と為し、張華を少傅と為し、和嶠を少保と為す。元康元年（二九一）、出でて東宮に就く。〔晋書〕卷五十三愍懷太子伝

惠帝は司馬適を皇太子に封じた後に、その師傅を選用了。何劭・王戎・楊濟・裴楷・張華・和嶠は、いづれも朝廷において德望高く、かつ政治にも影響力のある名士である。前掲注（一）千田氏論文で既に指摘されているように、司馬適の師傅は、『周礼』の太子二師・二傅・二保からなる六傅という制度を模倣し、後漢から兩晋時代までの期間で最も充実していると言える。

また、この配置には武帝の影響が大きいと考えられる。佐藤氏と千田氏は共に六人の名士の身分に注目するが、それより重視すべきなのは、この六人はほとんど惠帝とは縁がなく、むしろ武帝に信頼され、親近された者として、いはゆる「先帝老臣」（『晋書』卷三十六張華伝）である。何劭は陳郡何氏の家柄を持ち、武帝の幼馴染みであり、かつて司馬衷の太子中庶子を務めた。竹林七賢の一人である王戎は、琅琊王氏の家柄を持ち、太康年間に侍中・光祿勳・吏部尚書に任ぜられ、太康末期に母の逝世によって官職を辞した。楊濟は外戚の「三楊」の一人である。裴楷はかつて武帝が天子となる前に、既に彼の参軍を務めており、太康年間に侍中となった。張華は寒族であるが、かつて呉討伐の戦役において、最も強固な主戦派として、よく武帝の信頼を得たものの、太康末期に様々な讒言を

受けて官職を失っていた。また、和嶠に至ってはかつて武帝の中書令を務め、司馬衷を太子から廃すべきだと武帝を諫めており、太康末期に守喪の理由で官職を辞していた。六人の太子師傅のほかに重臣の子らを太子の賓に選用了。

又詔曰、「遼尚幼蒙、今出東宮、惟当頼師傅群賢之訓。其游処左右、宜得正人使共周旋、能相長益者。」於是使太保衛瓘息庭・司空泰息略・太子太傅楊濟息悫・太子少師裴楷息憲、太子少傅張華息禕・尚書令華廙息恒与太子游処、以相輔導焉。

又詔して曰く、「遼尚ほ幼蒙たり、今東宮に出、惟だ当に師傅の群賢の訓に頼るべきのみ。其れ左右に游処するに、宜しく正人の共に周旋せしめ、能く相ひ長益せん者を得べし」と。是に於いて太保衛瓘の息庭・司空(司馬)泰の息略・太子太傅楊濟の息悫・太子少師裴楷の息憲・太子少傅張華の息禕・尚書令華廙の息恒をして太子と与に游処し、以て相ひ輔導せしむ。(『晋書』卷五十三愍懷太子伝)

これら五人は皆「大臣子弟有名称者」である。このような豪華と言える面々によって、司馬適は立派に育てられるはずだった。だが僅か数ヶ月後、永平元年(二九一)三月、広義の「八王の乱」が発生する。「八王の乱」については、多くの先行研究があるので、その過程の説明は措く。ここでは八王の乱の中で皇太子と太子師傅の状況を述べておきたい。

丙午、皇太子冠、丁未、見於太廟。……三月辛卯、誅太傅楊駿・駿弟衛將軍珣・太子太保濟、……壬辰、大赦、改元。……夏四月癸亥……太子少傅阮坦為平東將軍、監青徐二州諸軍事。己巳、以太子太傅王戎為尚書右僕射。……六月、賈后矯詔使楚王瑋殺太宰汝南王亮・太保菑陽公衛瓘。乙丑、以瑋擅害亮・瓘、殺之、曲赦洛陽。以広陵王師劉寔為太子太保。……八月庚申……太子太師何劭為都督予州諸軍事、鎮許昌。

(永平元年「二九一」正月) 丙午、皇太子冠し、丁未、太廟に見ゆ。……三月辛卯、太傅楊駿・駿の弟衛將軍珣・太子太保濟を誅す、……壬辰、大赦し、改元す。……(元康元年「二九二」) 夏四月癸亥……太子少傅阮坦を平東將軍と為し、青徐二州諸軍事を監せしむ。己巳、太子太傅王戎を以て尚書右僕射と為す。……六月、賈后詔を矯り楚王瑋をして太宰汝南王亮・太保菑陽公衛瓘を殺さしむ。乙丑、瑋の擅に亮・瓘を害するを以

て、之を殺し、洛陽に曲赦す。広陵王師劉寔を以て太子太保と為す。……八月庚申……太子太師何劭を都督予州諸軍事と為し、許昌に鎮す。〔晋書〕卷四惠帝紀

太子太保について、司馬遷の冠礼の二ヶ月後に、賈后は「三楊」に対してクーデターを起こし、この職にあった楊濟を殺し、八月に劉寔を任じた。この時点で太子少傅は張華ではなく、阮坦であり、四月には阮坦も地方に赴き、その後継者は華廙に代わったようである。また、太子太傅について、王戎は四月に尚書右僕射になり、その後任者は孟觀であるらしい。太子太師について、何劭も八月に許昌に任じられた。また、太子少保である和嶠は元康二年に逝し、太子賓友である衛庭は元康元年六月に、その父親と共に殺されたと考えられる。

また、太子舍人潘尼が後に制作した「積奠頌」に〔晋書〕卷五十七潘尼伝「元康元年冬十二月、上は皇太子春秋に富むも、而れども人道の始は孝悌に先んずるもの莫きを以て、初めて命じて『孝経』を崇正殿に講ぜしむ（元康元年冬十二月、上以皇太子富於春秋、而人道之始莫先於孝悌、初命講『孝経』於崇正殿）」とある。この崇正殿での『孝経』講学の二ヶ月後、賈皇后は楊太后を殺し、このクーデターを収束させた。

司馬遷が皇太子になってから、クーデターが終わるまでの期間は、僅か一年半である。この間の諸々の変動から見れば、恵帝が当初これらの太子師傅や賓友を任じたのは、皇太子の教育のためというより、貴族、勢族、外戚、名士など各方の利益をある程度平衡するねらいがあったと考えられる。また、当時無職の王戎、張華、和嶠も含む武帝がかつて信用した大臣を再び政治の表舞台に登場させたのは、武帝時代から安定的に過渡をアピールするためであろう。では皇太子になった司馬遷はいかなる人間になったのであろうか。

### 三、司馬遷は頑劣な皇太子だったのか

『晋書』には師傅の設置の直後に、皇太子となった司馬遷について、次の一段落がある。

及長、不好学、惟与左右嬉戲、不能尊敬師傅。賈后素忌太子有令誉、因此密敕黄門閹宦媚諛於太子曰、「殿下誠可及壯時極意所欲、何為恒自拘束。」每見喜怒之際、輒嘆曰、「殿下不知用威刑、天下豈得畏服。」太子所幸蔣美

人生男、又言宜隆其賞賜、多為皇孫造玩弄之器、太子從之。於是慢弛益彰、或廢朝侍、恒在後園遊戲。愛埤車・小馬、令左右馳騎、斷其鞅勒、使墮地為樂。或有犯忤者、手自捶擊之。性拘小忌、不許繕壁修牆、正瓦動屋。而於宮中為市、使人屠酤、手揣斤兩、輕重不差。其母本屠家女也、故太子好之。又令西園壳葵菜・藍子・鷄・麵之屬、而取其利。東宮旧制、月請錢五十萬、備於衆用、太子恒探取二月、以供嬖寵。

長ずるに及び、学を好まず、惟だ左右と与に嬉戲するのみ、保傳を尊敬する能はず。賈后素より太子の令嘗有るを忌み、此に因りて密かに黃門闥宦に敕して太子に媚諛せしめて曰く、「殿下誠に壯時に及びて意の欲する所を極むべし、何為れぞ恒に自ら拘束するや」と。喜怒の際を見る毎に、輒ち嘆きて曰く、「殿下は威刑を用ふるを知らず、天下豈に畏服するを得んや」と。太子幸する所の蔣美人男を生むに、又た宜しく其の賞賜を隆くして、多く皇孫の為に玩弄の器を造るべしと言ひ、太子之に従ふ。是に於て慢弛なること益々彰らかなり、或いは朝侍を廢して、恒に後園に在りて遊戲す。埤車・小馬を愛し、左右をして馳騎せしめ、其の鞅勒を斷ち、地に墮ちしめて樂と為す。或いは犯忤する者有りて、手づから自ら之を捶擊す。性小忌に拘はり、壁を繕ひ牆を修め、瓦を正し屋を動かすことを許さず。而うして宮中に市を為り、人をして屠酤せしめ、手づから斤兩を揣るに、輕重差はず。其の母は本屠家の女なり、故に太子之を好む。又た西園に令して葵菜・藍子・鷄・麵の屬をを売らしめ、其の利を収む。東宮の旧制、月に錢五十萬を請ひて、衆の用に備ふるに、太子恒に二月を採取して、以て嬖寵に供す。

〔晋書〕卷五十三愍懷太子伝

皇太子司馬適は年齢を重ねると、急に頑劣な人物になつてしまつたことが書かれている。ここには主に六つの過ちを挙げている。第一に、左右の者と遊ぶのみで學問を怠り、師傅たちを尊敬しなくなつたこと。賈后も宦官に命じて司馬適のわがままを唆し、それを助長した。第二に、惠帝への朝見を怠り、東宮の後園で享樂に耽つたこと。第三に、左右の者が逆らえば、自ら相手を毆打したこと。第四に、些細な忌み事にこだわら宮内の修繕を禁じたこと。第五に、宮中に市場を作り、肉屋や酒屋の真似事をさせたり、西園の收穫を販売させて利益を得ていたこと。第六に、東宮の予算を二か月分の費用を要求して最賈の者に支給したこと。このうち、第三の件の具体例として、『晋書』愍懷太子伝と杜錫伝に、太子を諫めた杜錫の座布団に針を仕込んだことが記されている。他の五件について

は、いずれも『晋書』江統伝に記述された江統の諫言と一致する。<sup>13)</sup> これらの過失は確実に存在したと考えられるが、ここで注目すべきなのは、第二から第六までの件には司馬遷の具体的な行為を記すものの、第一については具体例を挙げていないことである。また、注(13)に挙げた太子洗馬江統の諫書にも、ただ「伏して惟るに殿下天は逸才を授け、聡鑑特達たり。臣謂へらく猶ほ宜しく時に聖令を発し、德音を宣揚し、保傳に諮詢し、侍臣を訪逮し、賓客に覲見し、盡くに接しむるを得べし。壅否の情沛然として交泰し、殿下の美煥然として光明たらん(伏惟殿下天授逸才、聡鑑特達。臣謂猶宜時發聖令、宣揚德音、諮詢保傳、訪逮侍臣、覲見賓客、得令接盡。壅否之情沛然交泰、殿下之美煥然光明)」と述べ、やはり具体的には書かれてない。さらに、前節で述べたように、八王の乱の最中には、太子の六傳について頻繁に人事異動が行われている。故に、「不能尊敬保傳」という点については、いささか懸念があると考えられる。

実は、愍懷太子の属官の中には、当時の文才に優れる士人が多く選ばれていた。前掲注(2)俞士玲著書には、太子洗馬陸機と同時期に東宮に仕宦した者として、太子家令虞濬・太子中庶子傅咸・太子舍人潘尼・太子洗馬馮文黒・太子中舍人張載などが挙げられている。元康時期の全体を通して、明確に官職の分かる太子属官については、筆者の統計によれば、ほかに太子侍講賈游、太子詹事裴權、太子洗馬鄧攸・潘滔・江統・劉務、太子舍人荀奕・王敦・杜蕤・魯瑤・賀循・庾詹、太子中舍人杜錫・顧榮、太子中庶子山簡・荀組・劉宝などがいる。<sup>14)</sup>

これらの属官の詩賦作品から、当時の皇太子と臣下たちとの集会や宴会の状況を窺うことができる。例えば、『文選』卷二十公宴類に陸機「皇太子玄圃の宣猷堂に宴せしときに令有りて詩を賦す(皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩)」がある。詩の前半は主に西晋王朝とその基礎を築いた人々を賛美している。後半は晋惠帝と皇太子司馬懿を称揚しながら、自分がこれから晋王朝に仕える志を表している。

皇上纂隆 經教弘道

皇上は隆を纂ぎ、教えを經め道を弘む。

于化既豐 在工載考

化に于て既に豊かに、工に在りて載ち考す。

俯釐庶績 仰荒大造

俯して庶績を釐め、仰ぎて大造を荒いにす。

儀刑祖宗 妥綏天保

祖宗に儀刑して、天保を妥綏す。

篤生我后 克明克秀  
体輝重光 承規景數  
茂德淵冲 天姿玉裕  
萑爾小臣 邈彼荒遐  
弛厥負擔 振纓承華  
匪願伊始 惟命之嘉

篤く我が后を生み、克く明らかに克く秀でたり。  
輝を重光に体し、規を景數に承く。  
茂德 淵のごとく沖く、天姿 玉のごとく裕かなり。  
萑爾たる小臣は、邈かなる彼の荒遐よりす。  
厥の負擔を弛められ、纓を承華に振ふ。  
願ふこと伊れ始めよりせしに匪ず、惟れ命を之れ嘉す。

陸機 「皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩」(『文選』卷二十)

司馬遷の招集に応じて、陸機はほかに、「皇太子賜宴詩」、「元康四年從皇太子祖會東堂」などを製作し、同時に嵇含・張載と「瓜賦」、潘尼・傅咸と「桑賦」を作った。また、潘尼には「七月七日侍皇太子宴玄圃園詩」、「皇太子上巳日詩」、「積奠詩」、「皇太子集應令詩」、「皇太子社詩」などがある。このような、皇太子を囲む文士たちの文学創作という状況は、かつての魏の皇太子曹丕のもとで花開いた建安文学の様相と相通ずるように思われる。

#### 四、皇太子から愍懷太子へ

しかし、かくいう皇太子は最終的に皇帝に即位できなかつた。その原因は彼と皇后賈氏一族の衝突にある。これについては『晋書』に多くの記述が見えるが、一例として愍懷太子伝の次の一段を挙げる。

諡嘗与太子困棋、争道、成都王穎見而訶諡、諡意愈不平。因此譜太子於后曰、「太子広買田業、多畜私財、以結小人者、為賈氏故也。密聞其言、云、『皇后万歳後、吾当魚肉之。』非但如是也、若宮車晏駕、彼居大位、依楊氏故事、誅臣等而廢后於金墉、如反手耳。不如早為之所、更立慈順者以自防衛。」后納其言、又宣揚太子之短、布諸遠近。于時朝野咸知賈后有有害太子意。

(賈) 諡嘗て太子と母に困棋し、道を争ふに、成都王穎見て諡を訶り、諡の意愈々平らかならず。此に因りて太子を后に譜りて曰く、「太子広く田業を買ひ、多く私財を畜へ、以て小人と結ぶは、賈氏の故の為なり。

密かに其の言を聞くに、云ふ、『皇后万歳の後、吾当に之を魚肉とすべし』と。但だ是くの如きのみならず、若し宮車晏駕し、彼大位に居らば、楊氏の故事に依りて、臣等を誅して后を金墉に廢さんは、手を反すが如きのみ。早に之の所を為し、更へて慈順なる者を立てて以て自ら防衛するにしかず』と。后其の言を納め、又た太子の短を宣揚し、諸遠近に布く。時に于て朝野咸な賈后の太子を害さんとする意有るを知る。

〔晋書〕卷五十三愍懷太子伝

『晋書』では屢々司馬遜の性格を「剛」と評価しており、彼に気性の激しい一面があったとわかる。当時賈氏一族の継承者である賈謐は東宮に侍していたが、二人は意気盛んで、お互いに不平が無くならずしはしは争い、ついに賈氏は元康九年（二九九）の年末に司馬遜を廢さんとクーデターを起こした。その粗筋は以下の通りである。

十二月、賈后將廢太子、詐称上不和、呼太子入朝。既至、后不見、置于別室、遣婢陳舞賜以酒棗、逼飲醉之。使黃門侍郎潘岳作書草、若禱神之文、有如太子素意、因醉而書之。……文曰、「陛下宜自了、不自了、吾当入之。中宮又宜速自了、不了、吾当手了之。并謝妃共要剋期而兩發、勿疑猶予、致後患。茹毛飲血於三辰之下、皇天許当掃除患害、立道文為王、蔣為内主。願成、当三牲祠北君、大赦天下。要疏如律令。」太子醉迷不覺、遂依而写之、其字半不成。既而補成之、后以呈帝。帝幸式乾殿、召公卿入、使黃門令董猛以太子書及青紙詔曰、「通書如此、今賜死。」遍示諸公王、莫有言者、惟張華・裴頴証明太子。……議至日西不決。后懼事變、乃表免太子為庶人、詔許之。

十二月、賈后將に太子を廢さんとし、上の不和を詐称し、太子を呼びて入朝せしむ。既に至るに、后見えず、別室に置き、婢の陳舞を遣りて賜るに酒棗を以てし、飲を逼り之を酔はす。黃門侍郎潘岳をして書草を作らしめ、禱神の文の若く、太子の素意の如きもの有り、醉に因りて之を書す。……文に曰く、「陛下宜しく自ら了ふべし、自づから了へざらば、吾当に入りて之を了へん。中宮又た宜しく速やかに自づから了ふべし、了へざれば、吾当に手づから之を了ふべし。並びに謝妃と共に期を剋み兩つながら発することを要む、疑ひて猶予し、後患を致す勿れ。三辰の下に毛を茹らひ血を飲み、皇天の許当に患害を掃除し、(司馬)道文を立てて王と為し、蔣を内主と為すべし。願成らば、当に三牲をもて北君を祠り、天下を大赦すべし。疏を要め

んこと律令の如し」と。太子酔迷して覺せず、遂に依りて之を写し、其の字半ば成らず。既にして補ひて之を成し、后以て帝に呈す。帝式乾殿に幸じ、召して公卿を入れ、黃門令董猛をして太子の書及び青紙を以て詔して曰く、「遙の書此の如し、今死を賜はらん」と。遍く諸公王に示し、言有る者莫し、惟だ張華・裴頠証して太子を明らかにす。……議日の西に至るも決せず。后事の変ずるを懼れ、乃ち表して太子を免じて庶人と為し、詔之を許す。

〔晋書〕卷五十三愍懷太子伝  
當時、賈氏一族の謀略に気づいていた侍中裴頠は東宮の宿衛を一万人規模に増強していた。これを憚る賈后は、偽つて恵帝の「不和（顔色が優れないこと）」を理由に司馬適を宮中に呼んだ。彼が中宮に至ると、賈后は侍女の陳舞をして司馬適に酒を飲ませ、泥酔したところで事前に用意していた謀反の成功を祈る咒文を写させた。その文書を恵帝と群臣に示し、司馬適を誅殺しようとしたが、張華と裴頠の強烈な反対により、ついには死罪を免じて庶人に廃することが決定した。時に元康九年（二九九）十二月三十日の出来事であった。

以降の司馬適の境遇を簡単に紹介したい。庶人に廃された司馬適は、許昌宮に幽閉され、翌年の三月に殺害された。賈皇后は最初宦官孫慮を遣り司馬適の毒殺を謀つたが、彼がこれに防備して毎日自分の目の前で食物を煮させたため失敗した。孫慮は司馬適に食物を与えず餓死させようとしたが、今度は宮人が密かに毎日壁を越えて食物を提供した。二度も失敗した孫慮は、ついに司馬適を廁にて鉄棒で毆殺した。その時の司馬適の叫び声は宮外まで聞こえたという。時に司馬適は二十三歳であった。この約十日後、趙王司馬倫はクーデターを起こし、賈后・賈誼一党を捕えて誅殺し、宿怨のあつた張華・裴頠をも誅した。ここに狭義の「八王の乱」がいよいよ勃発したのである。司馬適の葬礼は庶人として行われる予定であつたが、賈后の上表により、広陵王の礼で許昌に葬られた。賈氏一族が肅清されると、恵帝は慰霊の策を下し、司馬適を皇太子の位に回復させ、その喪を許昌から迎えて「愍懷」という諱を賜り、洛陽において再び葬礼を行い、顯平陵に葬り、前漢の武帝に倣つて思子台を築いた。元東宮臣の陸機と江統は、共に誅頌を製作して愍懷太子を讃えた。江統の文は現存しないが、陸機の「愍懷太子誄」は『芸文類聚』卷十六諸宮部に見える。

結び、愍懷太子司馬遜と陸機

第三節の末に触れたように、司馬遜の東宮では、前代魏の皇太子曹丕と同様に、当時の文士を集めていた。ただし、曹丕の場合と異なり、そこで創作された作品は、全て文士たちの手になるものであり、司馬遜本人の創作状況は不明である。なお、鍾嶸の『詩品』にも「元康文学」などの概念すら提起されていない。しかし、司馬遜をめぐる文学創作については、まだ検討の余地があると思われる。彼の東宮に集まった文士の中で、特に注目すべきなのは、西晋時代を代表する文人の陸機である。

陸機は入洛以後、初職として、元康元年（二九一）から元康四年（二九四）まで太子洗馬として司馬遜に仕えていた。この太子洗馬の経歴は、陸機の仕宦生涯における代表する時期と見做されている。劉宋の江淹（四四〇〜五〇五）は「雜体詩三十首」（『文選』卷三十所収）の中で、陸機の「羈宦（故郷を離れ仕宦する）」を詠じている。詩中で取り上げられているのは、陸機の仕宦生涯のうち太子洗馬という時期だけである。

儲后降嘉命 恩紀被微身

儲后嘉命を降し、恩紀微身に被る。

明発脊桑梓 永嘆懷密親

明発に桑梓を脊み、永く嘆きて密親を懷ふ。

流念辞南澁 銜怨別西津

念ひを流して南澁に辞し、怨みを銜みて西津に別る。

驅馬遵淮泗 旦夕見梁陳

馬を驅りて淮泗に遵ひ、旦夕に梁陳を見る。

服義追上列 矯跡廁宮臣

義に服して上列を追ひ、跡を矯<sup>あ</sup>げて宮臣に廁<sup>まじ</sup>はる。

朱黻咸髦士 長纓皆俊人

朱黻は咸く髦士、長纓は皆な俊人。

契闊承華内 綢繆逾歲年

承華の内に契闊し、綢繆して歳年を逾ゆ。

日暮聊摠駕 逍遙觀洛川

日暮れて聊か駕を摠べ、逍遙して洛川を觀る。

徂没多拱木 宿草凌寒煙

徂没に拱木多く、宿草は寒煙を凌ぐ。

遊子易感愴 躑躅還自憐

遊子 感愴し易く、躑躅して還た自ら憐れむ。

願言寄三鳥 離思非徒然

願<sup>おも</sup>ひて言<sup>こと</sup>に三鳥に寄せん、離思 徒然に非ずと。

一方、陸機の作品の中には、度々愍懷太子司馬適の面影が窺われる。現存する陸機の作品の中には、東宮における公宴詩があるだけでなく、司馬適が害された永康元年(三〇〇)には「愍懷太子誄」、『文選』に収められる「嘆逝賦」・「文賦」などの作品も製作している。これらの創作が、司馬適と無関係とは思われない。

陸機は如上の作品の中で、「羈宦」という彼の詩文における重要なテーマのほか、「死」というテーマにも触れている。ここに理論「文賦」を加えれば、まさに興膳宏『潘岳・陸機』(筑摩書房、一九七三年)で議論されている、陸機の文学作品における重要な主題が揃うことになる。陸機の文学創作は司馬適の東宮時期と密接な関係があるのではないか。この問題については、今後稿を改めて論じたい。

## 注

- (1) 「八王の乱」についての研究は、例えば、福原啓郎『西晋の武帝司馬炎』(白帝社、一九九五年)、同氏『魏晋政治社会史研究』(京都大学学術出版会、二〇一二年)がある。太子東宮についての研究は、安田二郎『西晋朝初期政治史試論』(初出は『東北大学東洋史論集』第六輯、一九九五年、後に同氏『六朝政治史の研究』第一編第一章、京都大学学術出版会、二〇〇三年に収録)、田中一輝『西晋の東宮と外戚楊氏』(初出は『東洋史研究』六十八巻三号、二〇〇九年、後に同氏『西晋時代の都城と政治』、朋友書店、二〇一七年に収録)、千田豊『西晋の太子師傳』(京都大学大学院人間環境学研究所歴史社会論講座『歴史文化社会論講座紀要』十六号、二〇一九年)などを参照。

- (2) 佐藤利行『西晋の文学集団』(『西晋文学研究』第一章、白帝社、一九九三年)、矢田博士『愍懷太子の東宮における詩歌創作の新たな展開』(『六朝学術学会報』第九集、二〇〇八年)、俞士玲『陸機陸雲年譜』(人民文学出版社、二〇〇九年)などを参照。

- (3) 東晋王隱『晋書』(『初学記』卷十中宮部所引)に、「初惠帝晚成、武帝遣才人謝玖給事惠帝、因而有娠。臨娶妃、遣致西宮、遂生愍懷也」とある。謝才人の妊娠は泰始八年(二七二)二月皇太子司馬衷と賈南風が結婚する前のことと

するようである。

- (4) 西晋武帝朝の太子冊立について、前掲注(1)安田氏論文を参照。また、賈后について、小池直子「賈南風婚姻」(『名古屋大学東洋史研究報告』第二十七号、二〇〇三年)、「晋惠帝賈皇后の実像」(『魏晋南北朝史のいま』「アジア遊学 二二三」、勉誠出版、二〇一七年)を参照。
- (5) 西晋武帝の三回(泰始元年、咸寧三年、太康十年)の諸侯王の封王とその意義について、安田二郎「西晋武帝好色攷」(初出は『東北大学東洋史論集』第七輯、一九九八年、後『六朝政治史の研究』に収録)を参照。
- (6) 「二師」について、勞格「校勘記」に司馬師の諱を避けて「帥」と呼ぶことの指摘がある。
- (7) 「晋書」卷三十七司馬略伝に「元康初、愍懷太子在東宮、選大臣子弟有名称者以為賓友、略与華恒等並侍左右」とある。
- (8) 「晋書」卷三十六張華伝に、「惠帝即位、以華為太子少傅、与王戎・裴楷・和嶠俱以德望為楊駿所忌、皆不与朝政。……及璋誅、華以首謀有功、拜右光祿大夫、開府儀同三司・侍中・中書監、金章紫綬。固辞開府」とあり、「八王の乱」において、太子少傅のことに言及していない。
- (9) 「晋書」卷四十四華廙伝に「惠帝即位、加侍中・光祿大夫・尚書令、進爵為公。廙心楊駿召、不時還、有司奏免官。尋遷太子少傅、加散騎常侍、動遵礼典、得傳導之義」とある。
- (10) 干宝「晋紀総論」(『文選』卷四十九)李善注が引く「晋紀」の「太子太傅孟觀知宮中旨、因讒二公、欲行廢主之事、楚王緯殺太宰汝南王亮・太保衛瑾」による。
- (11) 「晋書」卷三十六衛瓘伝に衛瓘の死について、「瓘不從、遂与子恒・岳・裔及孫等九人同被害、時年七十二。恒・子瓘・玠、時在医家得免」とある。また、和嶠の逝世について、同書卷四十五和嶠伝を参照。
- (12) 「晋書」愍懷太子伝の原文は「舍人杜錫以太子非賈后所生、而后性凶暴、深以為憂、每盡忠規勸太子修德進善、遠於讒謗。太子怒、使人以針著錫常所坐氈中而刺之」、卷三十四杜錫伝にも同様な記載がある。
- (13) 「晋書」卷五十六江統伝の原文は以下の通り。順序は異なるが、内容は愍懷太子伝とほぼ一致している。  
其一曰、六行之義、以孝為首。虞舜之德、以孝為称。故太子以朝夕視君膳為職、左右就養無方。……自頃聖体屢有

疾患、數闕朝侍、遠近觀聽者不能深知其故、以致疑惑。伏願殿下雖有微苦、可堪扶輿、則宜自力。……其二曰、古之人君雖有聰明之姿、睿詰之質、必須輔弼之助、相導之功、……伏惟殿下天授逸才、聰鑑特達、臣謂猶宜時發聖命、宣揚德音、諮詢保傅、訪逮侍臣、覲見賓客、得令接盡、壅否之情沛然交泰、殿下之美煥然光明。……其三曰、古之聖王莫不以儉為德。……窃聞後園鑲飾金銀、刻磨犀象、画室之巧、課試日精。……臣等以為画室之功、可且減省、後園雜作、一皆罷遣。肅然清静、優游道德、則日新之美光于四海矣。……其四曰、以天下而供一人、以百里而供諸侯。故王侯食籍而衣稅、公卿大夫受爵而資祿、莫有不贍者也。……今西園壳莖菜・藍子・鷄・麵之属、虧敗国体、貶損令問。其五曰、窃見禁土、令不得繕修牆壁、動正屋瓦。臣以為此既違典彝旧義、且以拘攣小忌而廢弘廓大道、宜可蠲除、於事為宜。

(14) 各人の典拠について、賈游は『晋書』卷四十賈模伝、孫旂は『晋書』卷六十孫旂伝、裴權・江統・劉務・杜錫は『晋書』卷五十三愍懷太子伝、荀組は『晋書』卷三十九荀組伝、秦戢は『晋書』卷四十八閻纘伝、顧榮は『晋書』卷六十八顧榮伝、王敦・杜蕤・魯瑤・潘滔は『晋書』卷九十八王敦伝、賀循は『晋書』卷六十八賀循伝、庾詹は卷七十庾詹伝、山簡は『晋書』卷四十三山簡伝、鄧攸は『通典』卷三十職官十二「太子庶子」条、劉宝は『通典』卷七十二「天子追尊祖考妣」条にある。

(15) 『晋書』愍懷太子伝には、「太子性剛、知賈謐恃后之貴、不能假借之。」とあり、また廢太子時に孫秀が「太子為人剛猛、若得志之日、必肆其情性矣」と評価したとある。

(16) 『晋書』卷三十五裴頠伝に「頠以賈后不悅太子、抗表請增崇太子所生謝淑妃位号、仍啓增置前後衛率吏、給三千兵、於是東宮宿衛万人」とある。